

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題としてみてください。会話が広がります。

令和7年10月24日(金)

みんなの居場所

独言

19日(日)20日(月)と修学旅行に行ってきました。天気も味方してくれて、外での活動時間帯は雨も降らず、全て予定通りに活動することができました。

修学旅行では主に平和について学習するのですが、今年も子ども達の真剣さを感じることができ、温かな気持ちで帰ってきました。世界に目を向けると未だに戦争が起きているのですが、原爆資料館を後にした子ども達に「どう思った？」と聞いてみると「絶対戦争はダメ」とか「同じ人間なのになぜ殺しあっているの？」というような感想が聞かれました。子ども達が修学旅行での学びをさらに深め発信してくれることを祈って止みません。

経緯①「人間関係」

私達教師には、普段のパフォーマンスの中で感覚的に身に付けていくスキルや法則があります。いわゆる経験則です。私の経験則ですから当てはまっているとは言いませんが、教職生活37年目、これについては自信をもつて話せる。あるいは子ども達、保護者の皆様に伝えたことを、綴ってみたいと思います。

思春期の入り口、子ども達は独特の人間関係を作ります。女子がグループを作ったり、排他的な人間関係を作ったりするところの現れです。そういう関係がクラスに働いているときは良いのですが、マイナスに働くと私は我々の指導が必要とします。しかし、思春期特有の水面下を進んでいく「いじめ」等はたがが悪いのです。まずそういうたいじめは、先生に気づかれないように巧妙に仕組まれています。たいじめるだけでなく、口止めをしたり、報復をほめたりするところによって、事態を悪化させていくのです。しかも、普段の生活の中、いじめがそつでないかの判断が難しい行動をとることも多いです。例えば「体を故意に当てる」とか「足をかける」とか「ひそひそ話」等がそうです。行動を捉えて教師が問い詰めても「わざとではあません」という返事が返ってくることも多いです。こういった子ども達の心理としては何かしらの不安を抱えていることが多いです。「孤立」「多様」「友達」「進退」等がそうです。やり場のない不安を、自分を守るために反社会的な行動に出るようになって、心身のバランスを崩しているのです。この状態が長く続くと本人にとっても不利な状態が生まれてきます。いじめの構造が逆転したり、孤立するところになります。また、子ども達は感覚的に「いじめ」は悪いこと知っているため、保護者に対しては自分を守るために都合の良い言い訳をするところがあります。保護者としては我が子の言い分を信じてあげたいと思うのは理解できますが、この時の子ども達の心理状態を冷静に分析、把握しなければ、負の連鎖が続いていくところになります。生身の人間同士の関係をうまくつかえないというところは、将来に影がります。そうならない様に家庭、子ども達のお話をしっかりと聴いてほしいと思います。

シリーズ「自分を語る」#45

嘉富西小3年目、いよいよ仕上げの年。縁あって持ち上がりで6年生を担任させて頂くことになり、私は卒業を「ゴール」として、子ども達にどのような短期目標を設定していくかを考えました。その最も大きなものが「42、195ナイトハイク」でした。この行事は私が最後の担任をさせて頂いた平成23年度まで続き、主幹教諭時代は部活の行事として、教頭校長時代はPTA行事として取り組むことになりました。この年は平成27年度ですから、歩く行事は約30年間続いたことになりました。しかし、新しいことへのチャレンジには相当のエネルギーが必要となることは明白で、嘉富西小学校3年目の4月から9月の間は42、195ナイトハイク実施に必要な情報収集を私1人で行うことになりました。

当時、私達、独自にたててもあつて、とにかく24時間営業で学校中心の生活を送っていました。そんな中、後の活動へと繋がっていく「42、195ナイトハイク」の基礎をつけた1年でした。嘉富西では、私的にも色々あって激動の3年になりましたが、内容があまり「お便り向き」ではないので話せません。悪しからず。前述の通り、単純に長い距離を歩くこの行事は、平成23年度まで続き、それ以降も形を変えながら続いていた行事です。しかしながら、初回のこの行事を操縦した時は、乗り越えるべき壁がありました。保護者や学校職員であれば当然心配する「交通安全」「健康・体力面」「サポート面」等です。また、校長先生からは「目的や身体への影響」について聞かれました。私はこの様なことを全てクリアするために、実際に歩いてみることにしました。

先ず始めに、コース選定をします。この頃は、安全面への配慮など言いながら、自分一人しか歩かないので、地図を使って適当にコースを決めていました。その後、自動車で実測して距離が確定してから歩き始めます。この時の実際のコースは、JR三角駅をスタートして、宇平島の北側を経由して国道30号線に入り、自宅のある熊本市北区までです。実測で44km位ありました。自分で歩きながら、時系列で体の変化(痛みや疲労)とその部位、気持ちの変化(特にモチベーション)をメモしていきます。1人で歩くペースも自分と合わせることができ、客観的な情報とは言えませんが、10時間かけて歩いた詳細な情報を基に計画を立て、校長先生の許可を得ました。この時はやはり「身を粉にして」という感じだったので嬉しかったことを覚えています。

さて、校長先生の許可は得たものの、それだけではだめです。次に了解を得なければならぬのは保護者の皆様でした。初めてこの話をした時の保護者の皆様の反応はまず、「驚愕」と「なぜか」というものでした。当然と言えば当然で、マラソンランナーでもあんなに、なぜ42、195km歩く必要があるのかと思うのが普通でした。しかも、初めての経験なので私の心の中にも明確な戦略が無く、行事実施後に現れる子ども達の心身の変化ははっきりしていなかったからです。そんな中、私を後押ししてくれたのは担任させて頂いた学校の子も達でした。学校の中で、私の想像でしかないナイトハイクの光景を、目を輝かせながら聞いている子ども達は、日に日にナイトハイクへの情熱が高まっていきました。夜の道路を友達と話しながら歩く光景を想像し、期待を膨らませる子ども達でした。(岡田隆之の「夜のピックアップ」という本を読んで、ナイトハイクのイメージが沸きました。)いよいよ月末、実施計画に参加申込書や子ども達に配付する用紙になりました。(つづく)